

『白い牙』に見られる特殊性と一般性
－作者ロンドンの一般性への希求－

はじめに

作品の中に作者の人生経験が投影されるのはよくある事だし珍しい事ではない。それゆえ批評の伝統的な手法である伝記的アプローチというのは、批評方法が細分化して複雑化した現在においても、いまだに有効的手段になり得るのである。ジャック・ロンドン (Jack London, 1876—1916) の『白い牙』 (*White Fang*, 1906)¹ は犬の血が4分の1混ざった狼を主人公にした動物文学であるが、作者ロンドンが移民の私生児として生まれ、父親からの認知を生涯受ける事がなかったという事実を考えるならば、作品と作者の間に何らかの関連性をもたせるのは、見当違いの事ではないだろう。

主人公の狼ホワイト・ファング (White Fang) の特殊性は幼い頃から際立っているが、ここでそれを説明した言葉を引用してみることにする。一緒に生まれた兄弟たちとの差がはっきりするのではないだろうか。

But he was, further, the fiercest of the litter. He could make a louder rasping than any of them. His tiny rages were much more terrible than theirs. It was he that first leaned the trick of rolling a fellow-cub over with a cunning paw-stroke. And it was he that first gripped another cub by the ear and pulled and tugged and growled through jaws tight-clenched. (49)

しかしながら、その狼は一腹の中で最も凶暴だった。誰よりも大きく耳障りな声でうなった。小さな怒りも他のものよりもずっとひどかった。巧みな前足さばきで、仲間の子を転がすいたずらを最初に覚えたのもこの狼だった。他の子の耳をくわえてひっぱったり、引きずり寄せたり、顎を食いしばっ

たまま唸ったりするのを覚えたのも一番早かった。

ホワイト・ファングの乱暴さが証明され、特殊性が強調されているのではないだろうか。

そしてロンドンの伝記的な事実を考えた時にホワイト・ファングとの共通性はさらに強化される事になる。J・ローレンス・ミッチェル(J. Lawrence Mitchell)がロンドンの幼い頃の様子を「彼は学校で落ち着きがなく攻撃的であり、不良のような感じだった。母親は近所の少年達と彼がひどい喧嘩に加わっていたと語っていた」(“ He was restless and aggressive in school and something of a delinquent. His mother reported him getting into terrible fights with the neighborhood boys ”)(226)と説明しているように、ロンドン自身も幼少時にホワイト・ファングのように乱暴さが際立っていたのである。ホワイト・ファングと同様の特殊性が作者ロンドンを説明する言葉なのである。

特殊性とは人とは異なる性質であり、有利にも不利にもなる両刃の剣である。ロンドンがこの特殊性に対して両面価値的な感情を抱いていたと想像するのは難しい事ではない。特殊性に対して一般性への希求というものが必ずあったはずなのである。ロンドンの作品の一般性を説明したアドリアン・プラッツェリス(Adrian Praetzelis)は「ロンドンの哲学の中心には倫理と美学を結びつける原理があり、道徳劇のような風景を彼が考えていたのだ」(“ At the center of London’s philosophy were principles that linked ethics and his aesthetics, allowing him to comprehend the landscape like a morality play ”)(34)と述べ、特殊性に対しての倫理や道徳といった一般性をはっきりと述べている。そしてジャンヌ・キャンベル・レースマン(Jeanne Campbell Reesman)も『白い牙』の中に見られる愛の要素に注目して、「ホワイト・ファングは現代のセクシャリティーを学び、愛の苦しみを知る事によって変化していくのである」(“ White Fang learns modern sexuality

and becomes acculturated by learning to love pain ”)(37)と述べ、性や愛といった一般性について説明している。

このように作者ロンドンや作者の投影である作品には特殊性と一般性の両方が見られるわけであるが、ここでは『白い牙』において、作者の特殊性と主人公ホワイト・ファングの特殊性がどのようにテーマに関わってくるのか、という事を明らかにしたい。これが明らかにされた時、特殊性とは反対の一般性への希求というものも同時に明らかにされるのではないだろうか。

1. 殺しの発達段階

ロンドンの作品は自然主義を特徴として、適者生存のテーマは繰り返し書かれた内容である。生きる事の反対概念としての殺しの描写が『白い牙』の中で強調され、秀逸であることは読者がすぐに気づく事であろう。狼であるホワイト・ファングが生き続けるのは、殺すからであり、殺しの意味を考えるのは重要であると筆者は考える。

『白い牙』に作者の人生経験が反映されているのは先に述べたが、ロンドンの作品における動物と人間の意識の重なりは、他の批評家も指摘しているところである。ラシャエル・L・ニコルズ(Rachael L. Nichols)は、ロンドンの『アダム以前に』(*Before Adam*, 1907)をダーウィンの進化論に絡めて論を展開しているが、彼女の言う「この小説はミッシング・リングの静的な肉体的出現の表現を避け、代わりに人間と動物の間の意識を交差を伝達する事に重きを置いている」(“ The novel avoids static representations of the physical appearance of the missing link and instead focuses on trying to communicate its consciousness— a consciousness in-between human and animal ”)(7)という言葉は『白い牙』中の殺しを述べるにあたって有効であると考えられる。ホワイト・ファングは殺しにおいても人間的特徴を示しており、発達段階があるので

ある。ここでは殺しにおける発達段階を示してみることにする。ライチョウの雛を偶然から手に入れ食べた後、親ライチョウとの戦いに夢中のホワイト・ファングの意識を引用してみることにする。

It was his first battle. He was elated. He forgot all about the unknown. He no longer was afraid of anything. He was fighting, tearing at a live thing that was striking at him. Also, this live thing was meat. The lust to kill was on him. He had just destroyed little live things. He would now destroy a big live thing. (57)

それは初めての戦いだった。得意になっていた。未知のものの事はすっかり忘れていた。もう何も恐れていなかった。自分に襲いかかってくる生き物と戦い、それを引き裂こうとしていた。そして生き物は肉であった。殺しの欲望にとりつかれていた。ついさっき小さな生き物を殺したのだ。今度は大きな生き物を殺すのだ。

ホワイト・ファングが殺しについて初めて知ったこと、それは「肉を殺すこと、肉を殺すために戦うという事に、自分が作られている目的をなしていた」(“He was doing that for which he was made—killing meat and battling to kill it”)(57)という知識である。この本能こそホワイト・ファングが殺しによって得たものなのである。殺しとはホワイト・ファングにとって生きる事の意味であり、原初から伝達されてきた知識であると言えるであろう。

殺しの意味の発達段階の最初期は、生きるために食う、食うために戦うという本能なのである。ここから、ホワイト・ファングの殺しの意味は変化していき、徐々に人間的な特徴との交差が明らかになってくるのである。本能について得られたものと述べる

のは反論もあろうが、戦いによって自分の中で眠っていた本能が触発され、気づいたという意味で得られたものなのである。ライチョウの雛を食べた結果の、親鳥との戦いによってホワイト・ファングは自分の戦う意味、肉を食うこと、殺すこととこののを意識したのである。

この生存のための殺しという最初期から変化し、ホワイト・ファングは通常動物ではありえない、楽しみとしての殺しを行うようになる。殺しにおける3段階の2段階目は、自らの楽しみのために行う本来不必要な殺しである。荒野から街へと移動したホワイト・ファングは「最初、白人の犬を殺すのは気晴らしであったが、後には仕事となった」(“ At first, the killing of the white men’s dogs had been a diversion. After a time, it became his occupation ”)(118)とあるように、殺しを楽しみとして行うようになるのである。白人の犬に自分へわざと喧嘩をふきかけるようにさせて、そしてあっという間にその犬の喉を切り裂いてしまう。これで満足して引き下がり、仕上げは他の犬たちが残酷にも殺してしまう。すると、白人の主人が怒って他の犬たちを棍棒で殴ったり、ピストルで殺してしまう。ホワイト・ファングは利口にも引き下がっているので、仲間の犬たちが刑罰を受けるのを眺めて楽しむ、という利口だがあくどい楽しみを経験しているのである。「こういった事全てがホワイト・ファングの日々を楽しいものにしていった」(“ All of which served to make White Fang’s days enjoyable ”)(119)とあるように、殺しの楽しみを味わっているホワイト・ファングは、動物ながらも悪人のような人間的特徴を有しているのである。²

このホワイト・ファング自身の行動も、悪人のようである、という動物とは違った人間的特徴を有しているが、こうした殺しの結果についても人間的特徴を生じさせているのである。殺しのスペシャリストとして喧嘩狼の名前で知られるようになったホワイト・ファングは、ビューティー・スミス(Beauty Smith)という新し

い主人に飼われるようになる。ホワイト・ファングは、様々な犬と決闘を繰り返して、賭博の材料とされるわけである。「ホワイト・ファングが戦い続けているので、死んでいったのは他の犬たちだった、というのは明らかな事である」(“ Since White Fang continued to fight, it is obvious that it was the other dogs that died ”)(131)とあるが、戦い続ける事によって、金をもたらす存在として、ホワイト・ファングの殺しが商業的な性格を持つようになるのである。殺しの結果金が動くというのは、人間と深く関わる事である。金とはまさに人間的特徴だからである。ビューティー・スミスに飼われた時点で、殺しは楽しみではなくなり、殺さなければ殺されるという緊張を強いられるものへと変化した。他の犬を楽しみで殺していた事に付随して、ビューティー・スミスの眼にとまったのであり、これを殺しの同じ2段階目と合わせて考えるようにここではしたいと思う。

そして金という人間的性格のみならず、ビューティー・スミスという名前とは全く違う、見た目の醜さと賤しい身分の男に、無敗の喧嘩狼の主人ということで、地位と名声をもたらす存在にホワイト・ファングはなっているのである。地位や名声というものも、金と並んで人間的な性格の事柄であるというのは、明らかではないだろうか。ジョナサン・バーリナー(Jonathan Berliner)はロンドンの小説と、ソーシャル・ダーウィニズムの関係について自身の論文で述べているが、「実際、ロンドンでは資本主義の経済的な戦いを明らかに肉体的な戦いにしているのは、しばしばはっきりとした事である」(“ In fact, London is often very explicit about making the economic struggles of capitalism palpable physical ”)(58)という言葉は、喧嘩賭博という肉体的特徴と経済の問題を結びつけている『白い牙』についても当てはまることであろう。ホワイト・ファングの殺しは、金と地位、名声が同時に関わるものなのである。殺しを楽しみとしていたホワイト・ファングの行動に付随するものとして、この段階を同じ2段階目と先

に述べたが、楽しみのための殺しも、賭博のための殺しも、望ましくないものに対しての殺しという意味で共通項を持つものである。この意味でも両者は同じ段階として考えるのが妥当ではないだろうか。

そして最終の第3段階目の殺しの意味は、ホワイト・ファンクを最後に飼う事になる愛の主人ウィードン・スコット(Weedon Scott)とともにやってくることになる。深い愛を知るようになるホワイト・ファンクからはビューティー・スミス時代の主人や人間への憎しみが消え、忠誠や愛情という感情が見られるようになる。³ウィードンの父、スコット判事(Judge Scott)を脱獄囚ジム・ホール(Jim Hall)から守ったのは、ホワイト・ファンクであり、ホワイト・ファンクのジム・ホールの殺しは主人への愛から生じたものである。自らも死線を彷徨うような大怪我を負うことになるにもかかわらず、忠誠と愛情によって、ホワイト・ファンクは必要な殺しをここでは行う事になるのである。ジム・ホールのスコット判事への恨みとホワイト・ファンクの示す忠誠は、ここで明らかな対比となっている。そして怪我から回復したホワイト・ファンクは、周囲の人間から祝福され、愛情を抱かれるようになる。ここで、ホワイト・ファンクの殺しはあたたかな人間的愛情をもたらすのであり、楽しみや賭博時代の殺しの、悪人や金、地位といった人間的特徴とは正反対の特徴をもたらすのである。殺しの意味の変化は明らかではないだろうか。

以上のように、殺しの意味の変化を3段階に渡って検証してきたが、殺しの最終的な意味は、肯定的な意味を持っているというものがはっきりしたのではないだろうか。人間性の愛に殺しは結びつくことになるのである。一番最初に作者ロンドンの特殊性に対する作品の一般性として、レースマンの愛情の議論やプラッツェリスの倫理といったモラルの議論を紹介したが、ホワイト・ファンクの殺しは、最終的にそうした議論を証明するものになるのである。殺しの肯定的な人間的意味は明らかになったのではないだろ

うか。

2. 光のイメージ

『白い牙』の中では光のイメージが繰り返されている。反復によりイメージが強化されるのは当然の事であるが、こうした光のイメージの強化は注目に値するものである。ここでは繰り返される光のイメージを論点としてみたいと思う。作品が「土地そのものが荒涼としていて、命がなく、動きもなく、とても淋しく冷たいので、そこに宿る精神は悲しさでさえもなかった」(“The land itself was a desolation, without movement, so lone and cold that the spirit of it was not even that of sadness”)(3)と始まるように、死は身近なテーマとして作品中に現われる。ホワイト・ファングの決闘なども死に関するものであり、死の重要性を無視することは出来ないだろう。⁴

作品冒頭で二人の男が迫り来る餓えた狼に対してたき火を燃やしている場面がある。この炎という光は「それだけが自分の体の肉とそれらの餓えた牙の間を隔てている」(“it alone intervened between the flesh of his body and their hungry fangs”)(23)のものであり、生死と関わる恐怖なのである。また同じようにホワイト・ファングが初めて炎を経験した時の反応は以下のようなものである。「それは今まで出会った事のない最悪の痛みであった。グレー・ビーヴァーの手の下で成長した太陽のような色の生き物のために、鼻と舌の両方を焦がされたからだ」(“It was the worst hurt he had ever known. Both nose and tongue had been scorched by the live thing, sun-colored, that had grown up under Gray Beaver’s hands”)(75)とあるように、この場面でも炎という光は苦痛というマイナスのイメージと共に表現されているのである。この苦痛はホワイト・ファングの炎への好奇心と共にやってきたものである。炎の光は、恐怖や死、苦痛といったマイナスのイメ

ージを想起させるというのがわかるのではないだろうか。⁵ではホワイト・ファンクが生まれた穴で初めて見た出口の光は、どのようなものなのだろうか。

It had been an irresistible attraction before ever his eyes opened and looked upon it. The light from it had beat upon his sealed lids, and the eyes and the optic nerves had pulsated to little, sparklike flashes, warm-colored and strangely pleasing. The life of his body, and of every fiber of his body, the life that was the very substance of his body and that was apart from his own personal life, had yearned toward this light and urged his body toward it in the same way that the cunning chemistry of a plant urges it toward the sun. (48)

目が開いて、それを見る前からそれは否応なしの魅力であった。そこから流れ込んでくる光が、固く閉じている瞼に当たると、目と視神経は温かそうな色をした妙に気持ちの良い、その小さな花火のような光の閃きに合わせて脈打つのである。肉体の生命と肉体を作っているあらゆる繊維の生命、つまり肉体の実体そのものであり、自分一個の命とは別の命が、その光を欲しちょうど植物の化学作用が植物を太陽に向かわせるのと同じように、その肉体を光の方へと駆り立てていた。

ここで描かれているのは「生存の必要物」(“a necessity of being”)(48)としての光への関心であり欲求である。未知のものへの好奇心が光に対して感じるものなのである。しかし同時にその光の中で起こる事は、ホワイト・ファンクが経験する恐怖でもある。その出口の光の白い壁でホワイト・ファンクはアナグマの肉食獣が自分を狙っているのを経験する。未知への好奇心はここ

でも恐怖と共に結びついているのである。炎の光が生死や恐怖と結びついている事は既に述べたが、日光の光は好奇心と共にやはり生死や恐怖を呼び起こすイメージとして使われているのである。反復される炎や日光の光のイメージ、強化される光のイメージは、恐怖や死といったものであるのがわかるのではないだろうか。少なくとも成長する前のホワイト・ファングにとって光は恐怖と結びつくものなのである。

しかし、パトリック・K・ドゥーレー (Patrick K. Dooley) が「ロンドンでは性格の変化の探求に興味を持っていた。というのも選択によって、個人の性格が作られ習慣になる時でさえも、劇的にそして完全にさえ変化されうるからである」 (“London was interested in exploring character change, for even when one’s character, wrought by choices, becomes habitual, it still can be dramatically and even diametrically changed ”) (54) と述べているように、外界の現象である光のイメージは、成長したホワイト・ファングと共に変化していくのである。

雪の降る北部から雪のない南部へと新しい主人と共に移動したホワイト・ファングはもはや他の犬と戦う必要がなく、そして狩りをする必要がなくなった人間の生活に溶け込んだ飼い慣らされた狼となる。その証拠に鶏小屋にホワイト・ファングが入れられても、全く鶏を襲う事がなくなる、という変化を経験するのである。脱獄囚から判事を救った後には、主人のみならず周囲の全員から愛の祝福を受けるようになる、という経験もするのである。持っている力ゆえに人間を恐れ、力ゆえに敬意を人間に払っていた北部時代のホワイト・ファングではなく、愛情によって人間と結ばれるという大きな変化を経験しているのである。このホワイト・ファングの性格の変化により、光のイメージも大きな変化を伴う事になるのである。作品の最終場面をここで引用してみることにする。

The other puppies came sprawling toward him, to Collie's great disgust; and he gravely permitted them to clamber and tumble over him. At first, amid the applause of the gods, he betrayed a trifle of his old self-consciousness and awkwardness. This passed away as the puppies' antics and mauling continued, and he lay with half-shut, patient eyes, drowsing in the sun. (194)

他の犬たちもコリーが嫌がるにもかかわらず、よちよち近寄ってきて、体の上にのぼったり、体の上で転がったりしたが、真面目くさって子犬のするままにまかせていた。神々に喝采された時、最初は昔の内気ときまりの悪さが少し現われた。でも子犬たちのふざけた仕草や悪戯が続くうちに消えていった。辛抱強く目を半分閉じたまま横たわり、太陽の中でまどろんでいた。

子犬が側にいて、柔らかな日に光の中で気持ちよく横たわるホワイト・ファングの様子がここでは描かれている。この日光はホワイト・ファングに眠気を起こすものであり、安らぎのイメージとして使われているのである。成長する以前の恐怖や死のイメージとは正反対の平和や新しい命といった安らぎなのである。ホワイト・ファングは自分が親になる事で、かつて自分が母親との再会の時に、自分とわからず牙を向けられたという拒絶の苦い経験を払拭したのである。血の繋がりの拒絶は、自分が親になる事により、血の連帯として変化したのである。ホワイト・ファングの眠気を誘う柔らかな日の光は、ホワイト・ファングの内面の穏やかさと関係しているのである。

恐怖に対しては自分を守る自己防衛反応を示すものであるが、親心というものは、自分ではなく子を守るという他者に対しての防衛反応が出てくるものである。親心を持ったホワイト・ファン

グの反応は、上の引用でも明らかであるが、光のイメージが関係するものが、恐怖という自己へのベクトルではなく、子を守るといふ他者へのベクトルになっているのは、大きな変化である。光は作品中で、ホワイト・ファングの成長と共にこのようにイメージを変化させるのである。恐怖や死のイメージは安らぎへと変化し、子を守るといふ他者へのベクトルに変わるのである。

結論

キャロライン・ハンセン (Caroline Hanssen) は『野生の呼び声』 (*The Call of the Wild*, 1903) や『白い牙』や幾つかの短編を取り上げて「これらの文学は強調された行動にそったプロットによって作られているが、フランク・ウォーカーは全ての作品が自伝的要素を含んでいる、ということを強調している」 (“ Although these literary tales are constructed along plot lines of heightened action, Franklin Walker emphasizes that all contain autobiographical elements ”) (192) と述べているが、『白い牙』の自伝的要素に注目した時、以下の場面は重要であると思われる。ホワイト・ファングが母親キチー (Kiche) と再会した場面である。

Before he had known the gods, she had been to him the centerpin of the universe. The old familiar feelings of that time came back upon him, surged up within him. He bounded toward her joyously, and she met him with shrewed fangs that laid his cheek open to the bone. He did not understand. He backed away, he bewildered and puzzled. (106)

神々を知る前には彼女が自分の世界の中心だった。その頃の感情がなつかしくなり、心の中に波のように押し寄せた。だ

から喜んで彼女の所へ飛んでいったが、鋭い牙で頬骨まで咬まれた。わけが分からなかった。途方にくれて、うろたえながら後ずさりした。

肉親からの拒絶を受けたホワイト・ファングである。私生児として生まれ、父親から子として認知される事がなかったロンドンの姿とも重なるのではないだろうか。この場面で、ロンドンの親族との結びつきの憧れが強く表現されているのである。

この論文の最初でロンドン自身の若い頃の乱暴さという特殊性とホワイト・ファングの特殊性が重なりあっている、という事は既に述べたが、特殊性に対しての一般性への憧れは、作品中でも証明できるのではないだろうか。孤独や人間の残酷さ等、様々な経験をしたホワイト・ファングの特殊性は、自分が親になり子を持つという生命の連続性に落ち着く事になるのである。肉親からの拒絶を受けたホワイト・ファングは、自分が子供との連帯を持つ事により、血の繋がり、肉親の関係性を回復する事になる。最終場面で特殊性は一般性へと変化したことが示され、ロンドン自身の一般性への憧れ、肉親への憧れは、投影されていると言えるであろう。ロンドン自身もインタビューの中で「私はいつも現存の規範を乱暴に攻撃してきたが、建設的な考えに対しても時間を取ってきた。現存の規範の攻撃ほどには建設的な考えに注意深く関わってきたわけではないが、無視してきたわけではない」(“ I have always assailed the existing order of things so savagely, but I have given some time to constructing theories also. I have not gone into that phrase of the subject as closely as into the other, but I have not overlooked it ”)(70)と述べているように、規範に対しては一定の価値を認めているのである。規範という広く認められたものに対する評価が、一般性への評価と近いことがわかるのではないだろうか。

第1節では殺しの意味が変化して、最終的に人間の愛に結びつ

くという事を証明し、モラルを感じさせる意味になったことを示した。そして第2節では、光のイメージが最終的に親子の連帯に降り注ぐ光として、血の繋がりを強調するものへと変化した事を示した。殺しの意味の変化も光のイメージの変化も、愛やモラル、血の繋がりとといった特殊ではない、普遍性や一般性に繋がるものだったのである。この論文のテーマは4分の1だけ犬の血が混じるホワイト・ファングの特殊性が、テーマとどういう関係があるか、ということであった。答えはもう明らかになったはずである。作者ロンドンの生い立ちが作品に投影され、ホワイト・ファングが特殊性から一般性の中に身を置く事によって、ロンドン自身の一般性への憧れが示されているのである。⁶ ホワイト・ファングが回復した血の繋がりは、私生児として認知を受けなかったロンドン自身の強い憧れの反映なのである。

親子関係の希薄さや親子の世代間格差が現代では度々問題視され、それが元で現代の人との繋がり的手段であるSNS等によって、新たな関係を結ぼうとする若者がいるという。人との繋がりの基本は家庭にあるのであり、家庭の中での平和が、他人に対しての態度や他人との協調性に関わってくるのは当然の事だと思われる。自然主義という厳しい現実で語られる事の多いロンドンの作品だが、ここで示した『白い牙』の中の作者の家庭と愛情への願望は、現代の読者にどう響くだろうか。家庭の温かみを信じる筆者の疑問で本稿を閉じることにする。

註

- 1 . 以下、『白い牙』からの引用は Jack London, *White Fang and The Call of the Wild*, Penguin Books, Penguin Popular Classics, 1994 年の版に拠る。
- 2 . この論分では殺しという言葉で統一しているが、殺害と区別する事が可能である。生存のために必要なものを殺し、あらかじめの計画で不必要なものを殺害、というように定義できる。聖書においても殺しは許されうるが、殺害については禁止されている。
- 3 . ビューティー・スミスのような人間に対しても、ホワイト・ファングの目からすると神に映り、その神の支配的特徴は力である。力の基準により、憎しみながらも敬っているという矛盾の精神状態は、この意味でもいまだ未熟であることが分かる。ウィードンの元に来て愛情によって敬意を示すようになり精神は成熟し、親になる心構えが出来た、と言えるであろう。
- 4 . この作品において戦闘の場面が圧倒的に多く、そして詳細に描かれている事は、弱肉強食のイメージを効果的に作り上げている。強いものが生き残る自然界において、ホワイト・ファングは環境適応能力にもすぐれていたため、生き残ったと言える。
- 5 . 聖書において火は必ずしも悪い意味ばかりではなく、浄化や神の表徴の意味もあるが、ここで述べているマイナスの意味では、「マタイによる福音書」25章41節に、地獄では「悪魔とその手下の天使のために用意してある永遠の火」(“ the everlasting fire prepared for the devil and his angels ”)が存在するという記述がある。
- 6 . もちろん作品と作者の無批判の同一視は危険であるが、ここで述べたように作者の伝記的事実とホワイト・ファングに共

通点があるのは明らかなことである。批評の基本アプローチ、伝記的アプローチは使い方によっては現代でも有効に機能している。

引用 · 参考文献

- Bedwell, Laura. "Jack London's "Samuel" and the Abstract Shrine of Truth." *Studies in American Naturalism*, Vol. 2, No.2 (Winter 2007), <https://www.jstor.org/stable/23431249>, pp. 150-65.
- Berliner, Jonathan. "Jack London's Socialistic Social Darwinism." *American Literary Realism*, Vol. 41, No. 1 (Fall, 2008), <https://www.jstor.org/stable/27747307>, pp. 52-78.
- Dooley, Patrick K. . "Jack London's "South of The Slot" and William James's "The Divided Self and the Process of Its Unification". " *Western American Literature*, Vol. 41, No. 1 (Spring 2006), <https://www.jstor.org/stable/43022441>, pp. 50-64.
- Hanssen, Caroline. " "You Were Right, Old Hoss; You Were Right": Jack London in Jon Krakauer's Into the Wild. " *American Literary Realism*, Vol. 43, No. 3 (Spring 2011), <https://www.jstor.org/stable/10.5406/amerlitereal.43.3.0191>, pp. 191-97.
- Jones, Karen. " Writing the Wolf: Canine Tales and North American Environmental-Literary Tradition. " *Environment and History*, Vol. 17, No. 2 (May 2011), <https://www.jstor.org/stable/41303507>, pp. 201-28.
- Labor, Earle. " Jack London's Symbolic Wilderness: Four Versions. " *Nineteenth-Century Fiction*, Vol. 17, No. 2 (Sep., 1962), <https://www.jstor.org/stable/2932517>, pp. 149-61.
- London, Jack. *White Fang and The Call of the Wild*. Penguin Books, 1994.

- Mitchell, J. Lawrence. "Jack London and Boxing." *American Literary Realism*, Vol. 36, No. 3 (Spring, 2004), <https://www.jstor.org/stable/27747140>, pp. 225-42.
- Nichols, Rachael. "Missing Links: Genre, Evolution, and Jack London's 'Before Adam'." *Studies in American Naturalism*, Vol. 8, No. 1, Special Issue: Naturalism and Science Fiction (Summer 2013), <https://www.jstor.org/stable/26300818>, pp. 6-20.
- Pease, Donald E. . "Psychoanalyzing the Narrative Logics of Naturalism: 'The Call of the Wild'." *Journal of Modern Literature*, Vol. 25, No. 3/4, Global Freud: Psychoanalytic Cultures and Classic Modernism (Summer, 2002), <https://www.jstor.org/stable/3831852>, pp. 14-39.
- Praetzellis, Adrian. "'Utility and Beauty Should Be One:' The Landscape of Jack London's Ranch of Good Intentions." *Historical Archaeology*, Vol. 23, No. 1 (1989), <https://www.jstor.org/stable/25615716>, pp. 33-44.
- Reesman, Jeanne Campbell. "'Never Travel Alone': Naturalism, Jack London, and the White Silence." *American Literary Realism, 1870-1910*, Vol. 29, No. 2 (Winter, 1997), <https://www.jstor.org/stable/27746687>, pp. 33-49.
- Ruh, Adam. "'Fifteen Minutes on Socialism with Jack London': A Recovered Interview." *Studies in American Naturalism*, Vol. 2, No. 1 (Summer 2007), <https://www.jstor.org/stable/23431204>, pp. 66-77.